

中国語の『可能補語』習得状況に関する一考察

鄧 凌志

アブストラクト

中国語の「可能補語」は母語話者により多くの場面で用いられるが、外国人学習者には理解がむずかしく、その実用は容易ではない。本論文では、可能補語の位置づけや下位分類を説明するとともに、中国語学習者の立場で可能補語の難点を分析し、問題解決策を考察・提案してみたい。とりわけ「可能」と「結果」の両方にとれる「動詞／形容詞＋“得”＋補語」フレーズは学習者を戸惑わせることが多く、そのため中国語運用の際学習者は可能補語フレーズを避け、意味の似通った「能＋V＋補語」構造を選ぶ傾向が顕著にみられるが、両者の詳しい使い分けを理解し、不自然な表現を回避するよう気をつける必要がある。一方、APUの中国語教材を考察する作業を通して、可能補語に関する教育内容に継承性が欠けていて、難易度の序列化にも不合理があることが分かってきた。この現状を踏まえ、筆者はアンケート調査問題を作成してAPU上級レベル学習者の可能補語習得状況を把握することに努めた。調査結果の分析にあたっては、特に「間違い方」を解析し、学習者がよく出来た部分と間違っていた部分をそれぞれまとめてみた。現行教育の改善と将来の課題展望に役立てばと思う。

キーワード：補語、可能補語、「能＋V＋補語」フレーズ、習熟度、間違い方

1. 補語と可能補語

中国語の補語に関する文法は、外国人学習者を対象とする中国語教育の中で形式的にも意味的にもっとも難しい部分である¹。しかし同時に補語の知識は中国語学習者には非常に重要である。というのは、A) 日常会話に現れる頻度が高い、B) 中国語の語法的特徴を現している、C) 補語の用法が複雑であるから²と呂文華は分析している。

補語とは、動詞、形容詞の後ろに置かれて、動作・状態について補足説明をする役目を果たす文成分である。

『対外漢語語法等級大綱』（孫瑞珍、1995）では補語を8種類に分けているが、日常会話の構文で使用頻度の上位四位は下記である。

a) 動作や状態の程度を表す程度補語文

「動詞／形容詞＋“得”＋補語」という文構造になる。

例：这两个字他写得不错。（彼はこの二つの字をうまく書きました。）

b) 行為の結果状態を表す結果補語文

文の中での構造は通常「動詞＋結果補語」になる。

例：我收到了录取通知书。（私は合格通知書を受け取りました。）

c) 動作行為の方向を表す方向補語文

文の中で「動詞＋目的語＋方向補語」という形をとる。

例：他把桌子搬到教室外面去了。（彼は机を教室の外に運びました。）

d) 動詞の行為が可能かどうかを表す可能補語文

動詞＋「得」／「不」＋結果/方向補語という形を取る。

例：这本书你看得懂吗？—看得懂。（この本を読んで理解できますか？—わかります。）

四種のうち、とりわけ「行為が実現可能かどうか」（上記d）を表わす可能補語の分析に多くの語学研究者が努力を傾注してきたが、いまだ説明され尽くしたとはいえない。

¹ 趙金銘『対外漢語教学概論』商務印書館 2004年

² 呂文華『关于述补结构系统的思考—兼谈对外汉语教学的补语系统』世界汉语教学，2001年第3期

一般的には、中国語母語話者の日常生活会話に用いられる頻度が高い可能補語表現ほど外国人学習者を戸惑わせる。具体運用の際、難しい可能補語の表現を避け、より易しい表現で通してしまうことがあるし、逆に不必要に使ってしまうこともある。さらには、形式が近い可能補語表現間の使い分けができないなどといった問題もある。これらの諸問題が上級レベルの学習者にも少なからず存在することは多くの研究者に指摘されている。

2. 先行研究

可能補語の文法的性質に関する研究は近年大いに進んでいる。これまでの研究成果をまとめて、可能補語をめぐる基本的な観点と教育上の主要点を下記に示す。

2.1 可能補語の位置づけ

学界には現在、可能補語を補語の可能形と捉える主張と補語の下位分類の一種とする主張がある。黄廖本の『現代漢語』、朱德熙の『語法講義』、劉月華の『实用現代漢語語法』及び于根元の『実用語法修辞』では「可能補語」を「可能性を表現する補語」³と定義する。

一方、全ての種類の補語に対してその「可能形」が存在すると一部の言語学者は主張する。齊沪揚(2005)は補語を結果/趨向/程度/情態/数量の5種類に分け、「得/不」が補語の真ん中に入ったものを補語の「可能形」⁴と定義する。丁声樹(1961)は補語の前に「得」があるかどうかによって、補語を二種類に分類している。「得」がない補語の前に「得」を入れればその補語の可能形になる⁵と主張する。つまり、二人とも補語の下位分類としての「可能補語」の存在を否定するのである。

本稿では可能補語を補語の下位分類の一種とする立場に賛同することをもって研究の基本姿勢としている。

2.2 可能補語の分類

可能補語フレーズの分類法をめぐってはいまも論争が続いているものの、以下の三種分類が主流を成しているとみてよい。

(1) 二分法

現代中国語文法の研究者朱德熙(1982)、王力(1984)、黄廖本(1990)らは可能補語を二種に類別している。一つは「吃不得(食べられない)のように、「得」/「不得」をもってある行動が実現できるかできないか(或はその行動による結果が発生するかしらないか)を表す類である。もう一つは、「結果補語」や「方向補語」と述語動詞の間に「得/不(軽声)」を入れて、ある行動の結果や趨向が実現できるかできないかを表す種である。例えば「看得懂(見て理解できる)。

(2) 三分法

劉月華(1983)、房玉清(2001)は、可能補語を三つのタイプに分ける⁶。

- 1) 動詞+得/不+結果/方向補語
- 2) 動詞/形容詞+得/不得
- 3) 動詞+得了/不了

(3) 四分法

趙元任(1979)は上述「三分法」の三つのタイプに、「慣用句的な可能補語」構造(「来得及」、「对不起」など)を加え、「四分法」を主張している。

「動詞+得(不)+補語」は通常の可能補語フレーズの形態である。つまり、「买得到(買える)、「买不起(高く

³ 劉月華等『实用現代漢語語法』外语教育与研究出版社, 1983年

⁴ 齊沪揚『對外漢語教學語法』復旦大学出版社, 2005年

⁵ 丁声樹『現代漢語語法講話』商務印書館, 1961年

⁶ 房玉清『实用汉语语法(修订本)』北京大学出版社, 2001年

て買えない)、「吃不完」(食べきれない)のようなフレーズにおける補語「到」・「起」・「完」は定着しきっており、いろいろな動詞と組み合わせることができるのである。それに対して、同じ形態の「对不起」(済みません)、「来得及」(間に合う)のようなフレーズはそれぞれ「对」と「起」、「来」と「及」を形態素として下位分化することができない。形式的には可能補語フレーズの特徴が見られるが、意味的には形態素の下位分化が不能なこれらの表現形式をフレーズと見るか、まとまった単語と見るかについては学界でまだ論争が続いている。中国語教材ではふつう単語として扱われることが多い。

3. 可能補語の学習目標

中国国家漢弁が発行する『高等学校外国留学生漢語言專業教學大綱』では中国の大学で中国語を勉強する留学生を対象に、可能補語の関連項目を以下のように第一、第二学年の学習目標に組み込んでいる⁷。

(1) 第一学年の可能補語教授内容：

1) 可能補語フレーズ1：動詞＋「得」／「不」＋形容詞／動詞。その肯定形、否定形、反復疑問形。

例：吃得完(全部食べられる)／吃不完(食べきれない)／吃得完吃不完？(全部食べられるか？)

2) 可能補語フレーズ2：動詞＋「得」／「不」＋方位詞(趨向補語)。その肯定形、否定形、反復疑問形。

例：搬得上去(上に運ぶことができる)／搬不上去(上に運ぶことはできない)／这个行李搬得上去搬不上去？(この荷物を上に運べるか？)

(2) 第二学年の可能補語教授内容：

1) 動詞／形容詞＋得／不＋「了」 例：忘不了(忘れられない)

2) 動詞＋得／不＋「動」 例：搬得动(運べる)

3) 動詞＋得／不＋「住」 例：记不住(覚えられない)

4) 動詞＋得／不＋「下」 例：坐得下((スペースが十分で)座れる)

5) 動詞＋得／不＋「着」 例：买不着(買えない)

6) 動詞＋得／不得 例：吃不得(食べられない)

一方、中国の海外中国語教育管理部門(中国語名称：国家对外汉语教学领导小组办公室汉语水平考试部)が編集した『漢語水平等級標準与語法等級大綱』では中国語の文法体系を甲・乙・丙・丁の4レベルにわけているが、甲・乙は初級レベル、丙は中級レベル、丁は上級レベルの文法内容にそれぞれ相当する⁸。可能補語に関する文法内容は同『大綱』の甲・乙・丙・丁4レベルに分布している。

甲級レベル：可能補語フレーズの基本形態。動詞＋「得…」；動詞＋「不…」

乙級レベル：常用の可能補語フレーズ。動詞＋「得」＋了／上／起…

解決得了(解決できる) 吃得上(食べられる)

打不过(打ち負けせない) 来不及(間に合う) 看不起(見下ろす)

丙級レベル：おもに否定形しか用いられない可能補語フレーズ。

「怪不得」(どうりで) 「恨不得」(…したくて ならない)

丁級レベル：慣用句／派生的な可能補語フレーズ。

「对不起」(済みません)、「靠得住」(頼もしい)⁹

⁷ 『高等学校外国留学生漢語言專業教學大綱』，国家对外汉语教学领导小组办公室編，北京語言大學出版社，2002年

⁸ 『漢語水平等級標準与語法等級大綱』高等教育出版社，1996年

⁹ 刘英林、李明『語法等級大綱的編制与定位語言教學与研究』2002年

上述を見れば、可能補語関連の文法は長時間の学習が必要で、中国語学習の全ての段階を貫く複雑な項目であることが分かる。

4. 外国人学習者から見る可能補語の難点

可能補語には外国人学習者に習得しにくい非常に微妙な部分がある。具体的には、教師が詳しく説明し、かつ多量の練習をさせるべき部分ということであるが、その要点を下記の二つにまとめる。

(1) 「可能」・「程度」の二義性を持つ補語構造

上記の補語分類の中の可能補語フレーズと程度補語フレーズはいずれも「得」が真ん中に入る(動詞/形容詞+「得」+補語)。例:「飞得高」(高く飛べる/高く飛んでいる)

一方、程度補語文の基本モデルはA:「主語+動詞+対象語+(同じ)動詞+『得』+程度補語」である。

例: 小李写这个字写得对吗? (李さんはこの字を正しく書けましたか?)

しかし、実際の会話表現になると、B:「対象語+主語+動詞+『得』+程度補語」の形をとることが比較的多い。

例: 这个字小李写得对吗? (この字を李さんは正しく書けましたか?)

それに対して可能補語文の基本モデルは「主語+動詞+『得』+可能補語+対象語」である。

例: 小李写得对这个字吗? (李さんはこの字を正しく書けますか?)

もう一つの形態は程度補語文のBモデルに酷似する「対象語+主語+動詞+『得』+可能補語」である。

例: 「这个字小李写得对吗?」(この字を李さんは正しく書けるか?)

構造的に近いこの二種類を外国人学習者は区別しにくいのである。例えば「写得好」というフレーズは文脈によっては、「良く書けた」とも「書くことができる」ともとれる。

楊寄洲の『汉语教程』では程度補語を第29課、可能補語を第55課・第56課の内容にそれぞれ組み入れている¹⁰。それに基づいた両者の区分法を下記のようにまとめる。

1) 補語フレーズの後に対象語は来ない

上述のように、程度補語文のA、Bいずれの場合も補語フレーズの後に対象語が来ることはない。

従って「小李写得对这个字吗?」の場合、「得」フレーズの後に対象語(「这个字」)が来るので、直ちに可能補語文と判定できる。

2) 補語部分の展開可能性

程度補語は陳述文の中で用いられる時、補語の前に修飾語をつけるなどの展開形を取ることが多い。

例: A: 这个字小李写得对吗? (この字を李さんは正しく書けましたか?)

B1: 这个字小李写得很对。(この字を李さんはとても正しく書けました。)

B2: 这个字小李写得对极了。(この字を李さんはすごく正しく書けました。)

可能補語フレーズの補語部分の前に修飾語が来ることはないので、B1とB2は可能補語文として解釈できない。つまり補語部分の前に修飾語があれば、即座にそれは可能補語ではないことが断定できる。

3) 否定形の形

可能補語フレーズの否定形は「動詞+『不』+補語」である。

例: 「写不好」(良く書けない)

それに対して程度補語フレーズの否定形は「動詞+『得』+『不』+補語」である。

例: 「写得不好」(良く書けなかった)

つまり、「得」+「不」の形式は程度補語フレーズにしか現れない。

4) 会話時の使い分け

¹⁰ 楊寄洲『汉语教程』北京语言文化大学出版社、1999年

可能補語文は実現可能の結果を、結果補語文は既に実現した結果を提示するので、前者の文は述語動詞に、後者の場合は補語の部分にそれぞれアクセントを置く。

可能補語の表現は基本的に会話文に属するが、実際の会話場面でいつもアクセントにまで注意が行き届くものではないので、普段から中国語可能補語のセンスを磨かせておくことが教師の責任だ¹¹と火明人は主張している。

5. 可能補語フレーズと「能+V+補語」構造

可能補語のルールを習得したにもかかわらず、実際中国語で読み書きや会話をする時、学習者はより簡単な「能+V+補語」(例: 食べきれない)の表現を取ることが圧倒的に多いことが分かっている。「可能補語フレーズ」と「能+V+補語」はいずれもある行為(結果)を実現する能力を表現できる。例えば、「他能听懂日语」と「他听得懂日语」(彼は日本語を聞いて理解できる)は意味の上で大差がない。

一方、両者の違いに関しては、「能+V+補語」は「能力」の意味以外に、「許可」として使うこともできるが、「可能補語フレーズ」は「許可」に使えないと多くの教科書が指摘している。例えば許可を求める場合、「他进去吗？」より「他能进去吗？」(彼は入ってもいいですか)のほうがより自然である¹²。しかし、両者の異同は実際そう簡単に決められることではない。

(1) 「現実条件(自身の原因や客観的な原因を含める)によってある結果や状態に到達できない」ということを表現する時、「能+V+対象語」より「可能補語フレーズ」を用いることが圧倒的に多い。場合によっては前者を使っはいけないこともある。

例: 酒太多了, 我不能喝完。(×)

酒太多了, 我喝不完。(○)

(酒が多すぎて全部飲むことはできません。)

(2) 慣用的な可能補語はどんな場合でも「能+V+対象語」で入れ替えられるわけではない。

例: 禁不住(禁じえない) 受不了(耐えられる) 舍不得(未練が残る/忍びない)

我禁不住想哭(×)

我不能禁不住想哭(○)

(泣きたくてたまりません。)

(3) 可能補語フレーズは「被」字構文や「把」字構文と一緒に使うことはできない。

例: 我能把这些菜吃完。(○)

我把这些菜吃得完。(×)

(これらの料理を全部食べることができます。)

6. APUの中国語教材に見られる「可能補語」の内容

中国国内で発行される外国人学習者向けの中国語教材には近年大いなる改良が見られ、中国語の文法に関する説明もおおいに充実してきた。

現在中国で使用されている外国人学習者向けの代表的中国語教材において可能補語をめぐる内容がどう扱われているかを整理したのが下表である。

教材	編集者	出版年次	出版社	可能補語に関する文法説明
『新实用汉语课本』第三册	刘珣	2003	北京语言大学出版社	1. 可能補語フレーズの構成 2. 疑問形と否定形

¹¹ 火明人「対外汉语教学中的可能补语与状态补语」『华北电力大学学报(社会科学版)』2007年第1期

¹² 彭小川、李守纪『对外汉语教学语法释疑201例』商务印书馆, 2004年

				3. 動詞/形容詞+得/不+ 「了」/「動」/「住」/「下」 4. 可能補語フレーズと「能+動詞」の違い
『汉语精读课本』	王健昆	2006	中国社会科学出版社	1. 可能補語フレーズの構成 2. 可能補語フレーズと「能(可以)+動詞」の違い 3. 文中のほかの成分とのかかわりかた。 4. 可能補語フレーズと程度補語フレーズの区別
『初级汉语课本』	鲁健骥	2003	北京语言大学出版社	可能補語フレーズの構成:「動詞+得+補語」。 可能補語文の否定形・疑問形(反復疑問形)

上記の教材はいずれも可能補語の概念や用法を体系的に詳しく説明してある。しかし一方で、母語話者の視点から可能補語を説明するものが多く、その文法的な概念や専門用語は外国語学習者にとって理解しづらく、学習者が自力で習得することは難しいであろう。

日本で使用されている中国語教材ではどうなっているか。手近であるところからAPUの言語教育センターで開設される中国語コース CHINESE 1～4の教材を調べ、「可能補語」に関する内容を下のとおりにまとめてみた。

CHINESE 1 教材:『加油!中国語』 张美霞・陈薇
可能補語に関する内容: なし
CHINESE 2 教材:『実力のつく中国語』 楊凱榮・張麗
第三課 咱们去吃早点吧 練習: 1) あの人の名前を(私は)どうしても思い出せない。 那个人的名字我怎么也想不起来。 2) 私は何回も書いてみたが、なかなか上手に書けない。 我写了好几次,怎么也写不好。 3) この本は難しくて、どうしても(読んで)理解できない 这本书太难了,我怎么也看不懂。
第十課 在外面乘凉 本文: 中国的象棋我一点儿都看不懂。 私、中国の将棋は全くわかりません。
第十三課 看过中国的戏剧吗? 本文: 我汉语才学了两年半,看得懂吗? 私は中国語を習ってまだたった2年半だけど、見てわかるかしら。 看不懂没关系,先体验一下。 わからなくてもいいから、とりあえず体験してみましょうよ。

<p>第十四課 我怕翻不好</p> <p>本文： 我怕翻不好，出洋相。 私はうまく訳せなくて、恥をかくんじゃないかと心配なんです。 今年要取的学分比较多，抽不出时间来。 今年はとらないといけないうちが多くて、時間がないです。</p>
<p>CHINESE 3</p> <p>教材：『大学生のための現代中国 12 話』 杉野元子・黄漢青</p>
<p>第四課 寒暄</p> <p>要点説明： 動詞＋“不/得”＋方向補語/結果補語 例文：A 我饱了，再也吃不下去了。(お腹いっぱい、もう食べられません。) B 你看得懂看不懂这本书？(この本を読んでわかりますか？) C 我看不清楚前面的道路。(前方の道路はよく見えません。)</p>
<p>CHINESE 4</p> <p>教材：『中国語実習コース』 張乃方</p>
<p>第一課 自我介绍</p> <p>本文： 恐怕到时候说不好。 その時にうまく話せないのではないかと心配しています。</p>
<p>第六課 上班上学</p> <p>本文： 下班的时间太晚，所以常常来不及。 就業時間がとても遅いので、それでいつもまにあわないのです。</p>
<p>第七課 飲料</p> <p>会話練習： 这么简单的中国话，你都听不懂吗？ そんな簡単な中国語も分からなかったのですか？</p>
<p>第十二課 旅行</p> <p>語句の活用： 我只记得他也是那个大学毕业的，哪一年我想不起来了。 彼もその大学を卒業したということだけは記憶していますが、どの年だったか思い出せません。</p>
<p>第十六課 贷款</p> <p>本文： 要是付现款的话，我恐怕一辈子买不成。 もし現金払いなら、恐らく一生買えないだろう。</p>
<p>第十七課 天气</p> <p>本文：</p>

等你发觉的时候, 已经来不及了。

気が付いた時にはもう後の祭りです。

第十八課 繁华区

本文:

如果在银座买不到的高档货, 大概在日本就很难买得到了。

銀座で買えない高級品があれば、多分日本で買うことは難しいでしょう。

APU 正課の CHINESE 1～4 の教材は、一貫したシリーズものではなく、異なるシリーズから選び取った教科書なので、継承性に欠ける面があると思われる。教員が教材以外から関連文法知識を集め、補助知識として普段の中国語講座に組み入れることが必要になる。

具体的に言えば、CHINESE 2 の教材『実力のつく中国語』第三課の練習部分から可能補語の内容が導入されることになるが、この第三課までには可能補語関連の知識は教材に出ていないことが本節の調べで分かった。そして、第三課の当該練習問題の難度を見れば可能補語に相当習熟していなければうまくできないことが想定される。対処療法としては、教員があらかじめこの教材の内容に関連した予備教育をしておくことが考えられる。前述したように、外国人学習者にとって「可能補語」の用法は非常に難解なので、普段から漸進的にしかも組織的に「補語」-「可能補語」の概念と用法を導入し、練習を重ねて強化する必要があるだろうと思われる。しかしそれ以前の問題として、CHINESE 3 の段階で中国語の語彙や表現、特に実用レベルの会話文表現が大幅に増えるが、難易度のより高い可能補語表現やそれに関する練習が教材にほとんど見られないという教材実態がある。

7. 可能補語の用法に関する APU 中国語受講生を対象とした調査

7.1 調査の意図

教師は中国語の文法構造を十分に把握した上で外国人学習者の(母国語の影響による)中国語習得上の特徴などを掴む必要があることはいうまでもない。そのためには、中国語と外国語(学習者の母国語)の比較研究をし、学習者の「誤り方」を分析していかなければならない¹³と趙金銘は指摘している。

APU 正課上級レベルの学習者にも可能補語の運用に困難を感じる層が存在することを担当教師から直に聞いたことがきっかけで、筆者は下のようなアンケート問題を考案し、可能補語をめぐる CHINESE 4 の学習者の習得状況を調べることを試みた。

中国語の「可能補語」に関するアンケート問題

一 A、B、C、D の選択肢から正しい言葉を選んでください。

問1、他的汉语水平()。

A 上不够考汉语研究生的 B 够不上考汉语研究生的

C 够不考上汉语研究生的 D 够不考汉语研究生的

(彼の中国語のレベルでは、中国語の大学院入試には合格できないでしょう。)

問2、我的汉语水平很低, 心里虽然有很多话, 但是()。

A 说不了 B 说不出来 C 说不懂 D 说得了

¹³ 趙金銘『外国人语法偏误句子的等级序列』语言教学与研究 2002 年第 2 期

(中国語のレベルが低くて、言いたいことはいっぱいあるが、うまく喋れません。)

問3、我刚到日本的时候()生鱼片,现在已经习惯多了。

A 吃不了 B 吃不到 C 吃不起 D 吃不上

(日本に来たばかりの時は刺身を食べられなかったが、今はもうだいぶ慣れていました。)

問4、门太小了,家具太大,()。

A 抬不进去 B 不抬进去 C 抬进去 D 不能抬进去

(入り口が小さくて家具を家の中に運び込むことはできません。)

問5、姐姐要出国了,我真()她走。

A 禁得住 B 舍不得 C 经不起 D 对不起

(お姉さんが外国へ行くことになっているが、私はどうしても彼女と別れるのがいやである。)

二 文を完成してください

問6、这个问题太难了,我怎么也_____。(回答)

(この問題は難しくてなかなか答えられない。)

問7、这么多菜,我一个人怎么吃也_____。(吃)

(こんなに多くの料理は私一人ではどうしても食べきれない。)

問8、这么小的房间,你们三个人_____吗?(住)

(こんな狭い部屋に三人も住めるのか?)

上述アンケート問題の中で、問2・問3は、「動詞+得/不」が「了/起/到」などの補語とそれぞれ組み合わせられた時の異なる語意を正確に把握できるかどうかを調べるための設題である。「禁得住」・「舍不得」などの慣用的な可能補語フレーズの習得状況を調べるための問題は問5である。問1・問4は「動詞+得/不+補語」を長文に用いるときの語順問題を中心としている。そして、回答者には可能補語表現を避けようとする傾向がどのぐらいあるか、そして自主的に可能補語フレーズを作成する能力はどこまであるかを考察することが問6・7・8の目的である。

7.2 データ集計

APUの2013年秋期 semester CHINESE 4の受講生計13名を対象に行った調査の結果を表2にまとめる。

表2 「可能補語」アンケート結果表

問題/正答	正答率	誤答	誤答の比率
問1、 他的汉语水平()。 B 够不上考汉语研究生的	76.92%	A 上不够考汉语研究生的	0%
		C 够不考上汉语研究生的	15.38%
		D 够不考汉语研究生的	7.69%
問2、我的汉语水平很低,心里虽	76.92%	A 说不了	23.08%

然有很多话,但是()。B 说不出		C 说不懂	0%
		D 说得了	0%
問3、我刚到日本的时候()生鱼片,现在已经习惯多了。A 吃不了	61.54%	B 吃不到	15.38%
		C 吃不起	15.38%
		D 吃不上	7.69%
問4、门太小了,家具太大,()。A 抬不进去	92.31%	B 不抬进去	7.69%
		C 抬进去	0%
		D 不能抬进去	0%
問5、姐姐要出国了,我真()她走。B 舍不得	100%	A 禁得住	0%
		C 经不起	0%
		D 对不起	0%
問題/正答	正答率	代表的な誤答	
問6、这个问题太难了,我怎么也(回答不出/回答不了)。	30.77%	不能回答 (53.85%)	
問7、这么多菜,我一个人怎么也(吃不完/吃不了)。	61.54%	吃不下(去) (30.77%)	
問8、这么小的房间,你们三个人(住得下)吗?	7.69%	住得了 (38.46%)	

7.3 結果分析

上述のデータはある側面でAPU中国語学習者の可能補語に関する習得度を示していると思われる。

まずは常用の可能補語フレーズに関する問題は正答率が高い、特に「舍不得」(未練が残って)離れたくない、经不起(耐えられない)など慣用的な可能補語フレーズはほぼパーフェクトにできていると言えよう。

一方「吃不了」(食べ慣れない/食べきれない)・「吃不到」(入手しにくくて)食べられない・「吃不起」(値段が高くて)食べられないなど、同じ動詞で複数の可能補語フレーズが出来る場合、それぞれのニュアンスを正確に把握する必要がある。母語話者である中国人は自然に「了」・「到」・「起」などの意味を正確に把握し、いろんな可能補語フレーズに活用するが、外国人学習者はなかなかその域に達することができないと思われる。

それに2音節の「V」(動詞)がどのように可能補語と組み合わせられるかがわからず、可能補語の表現を避けてとおる傾向があることが問題6の「誤答」を見れば分かると思う。可能補語と組み合わせられる動詞は1音節が普通で、2音節がほとんど見当たらないことも一因であろう。

最後は「住得下」(部屋が広くて)住める・「靠不住」(頼りにならない)など、教科書であまり見かけない可能補語フレーズは正答率が低く、学習者が自力で可能補語フレーズの作成を試みてうまくいかないことが多いようだ。

8. 結論と今後の課題

可能補語に関連する文法項目は多いので、中級・上級の中国語コースで教師がその項目を難易度の順に計画的に導入し、学習者に繰り返し練習をさせることが重要である¹⁴と陳東艶は指摘している。さらに言えば、実際練習(特に会話練習)の場合、学習者が慣れない可能補語表現を避けて通る傾向に教師側は十分注意を払い、それを食い止める必要がある。

一方、学習者の「間違い方」に留意することも不可欠なことである。特にAPUの中国語学習者は母国語がそれぞれ違

¹⁴ 陳東艶『对外汉语教学中的可能补语偏误分析』 <http://www.doc88.com/p-949523366923.html>

うので、中国語習得上の「間違い方」もそれぞれ違うことが想定される。その「間違いの仕方」を詳しく分析することにより、学習者の母国語からの（中国語学習に対する）マイナス影響を抑えることができると思われる。1980年代からこういう言語学習過程における「間違い方」の分析研究がPit・Corderをはじめとする多くの言語学者により提唱されてきた。

最後に、可能補語の文法的研究も教授法の前進につながる不可欠な要素である。例えば前述の二義性をもつ補語表現（「写得好」、「扫得干净」など）をより効率的に見分け、それを活用する方法があるか？この問題を解決するには、二義性をもつ補語の用例をより詳しく分析・研究し、可能補語のより特徴的な要素を掴んでいかなければならないであろう。こうして初めて合理的で科学的な教授法を確立することができると思われる。

参考文献

【中国語】

- 刘珣（2001）『对外汉语教育学引论』北京语言大学出版社
 吕叔湘（1979）『汉语语法分析问题』商务印书馆
 王建勤（1997）『汉语作为第二语言的习得研究』北京语言文化大学出版社
 佟惠君（1986）『外国人学汉语病句分析』北京语言学院出版社
 程美珍等（1997）『汉语病句分析九百例』华语教学出版社
 李大忠（1996）『外国人学汉语语法偏误分析』北京语言文化大学出版社
 狄昌运（1996）『怎样说对？—日本人汉语学习中常见语法错误辨析』北京语言学院出版社
 吴丽君等（2003）『日本学生汉语习得偏误研究』中国社会科学出版社
 朱庆明（2005）『现代汉语实用语法分析（上册）』清华大学出版社
 高顺全（2004）『三个平面的语法研究』学林出版社 2004
 柯彼得（1990）「汉语作为外语教学的语法体系急需修改的要点」『第三届国际汉语教学讨论会论文集』北京语言学院出版社

【日本語】

- 郭春貴（2001）『誤用から学ぶ中国語』白帝社
 大河内康憲（1980）「中国語の可能表現」日本語教育 No. 41
 杉村博文・木村英樹訳（1995）『文法講義 朱德熙 教授の中国語文法要説』（朱德熙1982の日本語訳）白帝社
 影山太郎（1996）『動詞意味論』くろしお出版
 荒川清秀（2008）「“～不了”は二つか」『日本語と中国語の可能表現』白帝社
 鳥井克之（2004）「再論 中国語の複文について—新しい中国語教学文法の再構築を目指して—」『外国語教育研究』第8号
 杉村博文（1994）『中国語文法教室』大修館書店
 伊藤さとみ（2003）「中国語の可能補語」『日本東洋文化論集』No. 9